

9月9日からの大雨に伴う営農技術対策

平成13年9月12日
北海道農政部

秋雨前線と台風15号の影響により9月9日以降地域によっては200mmを超える降雨があり、病害虫の発生や腐敗等が発生しやすい状況にありますので、次に注意し指導の徹底に努めてください。

1 水稲

登熟後半では冠水による影響は小さいが、倒伏をした場合、穂発芽や着色粒の発生、登熟の停止などが心配されるので、速やかに刈り取るか別刈りをする。

2 畑作物

(1) 秋まき小麦

は種作業の遅れを防ぐため、排水対策に努める。やむを得ず遅播きになる場合は、は種量を12～14kgに増やし、越冬前防除及び融雪促進により雪腐病の発生防止に努める。

なお、秋の窒素施用は増量しても吸収できず流亡するので、適正量以上の施用をしない。

(2) 小豆・菜豆

ニオや島立ての状態では水浸している場合は排水、風乾の促進に努める。立毛中に浸水した場合は早めに収穫し、島立てする。

(3) ばれいしょ

浸冠水10時間以上で減収が生じ、30時間を超えると塊茎腐敗による大きな減収に至るので、排水対策を急ぎ、ほ場が乾燥したら収穫する。収穫後は十分に乾燥させ、腐敗、傷、緑化いも等を取り除く。

(4) てんさい

根腐病、黒根病など地下部の病害に対しては、排水対策によって被害の進行を防ぐ。褐斑病が蔓延するおそれのあるほ場では機械作業が可能となり次第、防除を行う。

3 野菜

(1) たまねぎ

たまねぎは、浸冠水により、軟腐病や貯蔵腐敗(りん片腐敗病・灰色腐敗病)が発生し易いので、ほ場の表面排水対策を急ぎ、ほ場の乾燥を待って防除を実施する。特に、根切り処理が遅れたり、枯葉の遅れているほ場の病害虫の発生に注意する。収穫は首部の乾燥を待ち、晴天時に行く。罹病球を厳しく選別除去し、製品への混入を避ける。収穫後は雨があたらないようにし、風通しの良い場所で風乾をしっかりと行う。

(2) 根菜類

にんじんは、土壌水分過多条件で、着色不良、裂根の発生、軟腐病や根腐病、黒葉枯病の発生が多くなる。傾斜ほ場では土壌流失により、青首が増加する。ほ場乾燥後に培土を行い、黒葉枯病防除を行う。

だいこんは、軟腐病や横しま症等が発生が多くなるので、ほ場の排水に努め、予防防除を行う。

ながいもは、褐色腐敗病や根腐病の発生が多くなるので、これらの罹病いもは収穫時にほ場外に持ち出し処理する。

(3) 葉茎菜類

葉菜類では軟腐病、細菌性病害の発生が予想される。

きゃべつの裂球の発生が多くなるので、収穫可能なものは速やかに収穫し、品質の劣るものが混入しないよう選別に努める。収穫まで間があるものについては、細菌性病害の被害を防止するため、殺菌剤を散布する。

アスパラガスは斑点病の発生に注意し、防除を徹底する。

露地ねぎは、ほ場乾燥後にべと病、黒斑病、細菌性病害の防除を実施する。また、培土の崩れの補修等に努める。

(4) 果菜類

ハウス栽培で、泥水等の浸水で茎葉・果実に汚れが付着し品質に影響するものは、清水で散水洗浄する。

果実に被害がなく収穫可能なものについては、利用できる側枝を伸長させ、葉面積の確保に努める。なお、草勢が弱まると考えられるので、病害の発生に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。

かぼちゃは、癒傷コレク(いわゆるガンベ)が発生する恐れがあるので、溝切りなどで表面排水に努める。また、べと病や疫病が発生しやすい条件なので防除に努める。収穫期に達しているものや適期に近いものは晴天日に収穫し、キュアリングを徹底して腐敗果実を出荷しない。

きゅうりやメロン等のうり類は、短時間の滞水でも根腐れを起こしやすく、トマトやピーマン等のなす類は浸水により疫病等が発生し青枯症を起こす。これら浸水したハウスは、速やかに表面排水に努め、残さ処理、防除を行う。

4 果樹

(1) 土砂が流入した園地は、速やかに樹冠下や根回りの土砂を取り除く。

(2) 樹冠下の表土が流失し根が露出した場合、速やかに土をかけて根の乾燥防止を図る。

(3) ぶどうは吸水により、裂果が多発すると予想される。裂果は二次的に灰色かび病が併発するので可能な限り摘除する。また、プル-ンでも裂果が多発すると予想されるが、裂果した果実は、灰星病・灰色かび病が併発するので可能な限り摘除する。

5 花き

- (1) 浸水したほ場においては、排水と病害虫防除を速やかに実施する。
- (2) 浸水により花きのなびきや倒伏が見られる場合は、切花の曲がり軽減のため回復可能であれば早急に支柱とフラワーネットを固定・調整し直しを行う。
- (3) 茎葉や花茎部に浸水被害を受けたもので回復・修正可能なものは、汚染被害部の清水洗浄や切除・摘み取りや薬剤散布を行う。
- (4) 採花期を迎えている切花ほ場では、土壌過湿の長期化による品質低下（軟弱化・病害発生）を回避するため、ハウスの通風換気に努める。
- (5) 被害軽微で収穫・出荷する場合、信用を損なわないよう適切な格付けと検品の徹底に努める。
- (6) 土壌やハウス内の過湿により発生の高まる病害を主体に、早めに薬剤防除を実施する。薬剤散布後ハウス内が乾きにくい場合は、少量散布防除機やくん煙剤の適切な使用を図る。

6 サイレージ用とうもろこし

- (1) 滞水しているほ場は、速やかに排水に努める。
- (2) 倒伏の傾きが45度以下の場合は、今後の生育に大きな支障はないと見込まれる。45度以上のものでもある程度の回復が望めるので、基本的には今後の生育期間を確保する。
地際まで倒伏したもので、雄穂部からある程度起きあがってくることが見込まれる。その程度は絹糸抽出から日が浅いものほど大きく、雌穂の熟度が進んだものほど小さい。収穫作業機の拾い上げ機能及び性能などを勘案し、収穫時期を決める。
- (3) 倒伏によって、雌穂熟度が緩慢になる。黄熟期に達していないものは生育日数の確保に努める。
同程度の倒伏であれば、雌穂の熟度が進んだものから収穫を始め、未熟なものは遅らせる。ただし、折損により回復が望めないものや、茎葉の傷みの程度が大きく腐敗が予想されるものは収穫を早める。
- (4) 収穫作業においては、ハーベスタの食い込み量の変動が大きく、切断刃の損傷やとうもろこしの詰まりを起こしやすいので作業機の運行速度は控えめにし、作業状態をよく確認する。
とうもろこしの切断長は、黄熟期であれば10mm、完熟した場合や霜により葉が枯れ上がったものは5mm程度とする。切断長が粗くなりやすく、原料密度が高まりにくいので、発酵品質の低下や二次発酵の発生の抑制に努める。
原料の水分過剰と土砂混入が酪酸発酵の原因になりやすい。収穫作業は極力晴天に行う。

7 サイレージ調製

土砂が付着したとうもろこしや牧草は、発酵品質、栄養価及び嗜好性などに悪影響を及ぼす恐れがあるので、次の点に留意する。

- (1) 土砂の付着がある程度自然に解消されるまで収穫調製を待つ。
- (2) 土砂が付着したまま収穫調製しなければならない場合は、ギ酸などの添加を行う。
- (3) 刈取りや集草の際、なるべく地際の土砂を拾い込まないように注意する。

- (4) 未熟なとうもろこしは、軽い霜なら登熟が促進されるので、可能な限り調製を遅らせる。やむを得ず高水分の状態では排汁対策を講ずるとともに、茎葉が一方に片寄ることがないように詰め込む。
- (5) サイレージ調製作業は、踏圧によって密度を高めるが、一方において密封を終えるまでの所要時間を短縮することが望ましい。
- (6) サイレージ添加剤はそれぞれの剤の使用法に従う

8 飼料対策

- (1) 梱包飼料のサイレージ臭や焦げ臭に注意し、くん炭化や自然発火の防止に努める。
- (2) ほ場に仮置きした梱包飼料は排水の良い場所に移動する。
- (3) 降雨によるロールベールの浸水程度は、上部で10～15cm、下部で20cm程度、ロールベール全体の体積で35%程度に達する。ロールベールの状態を確認し、傷んだ部分は廃棄し、浸水したものは早めに利用する。

9 家畜

- (1) 浸水した牛舎は速やかに排水対策を講じ、舎内の乾燥化に努める。
- (2) 畜舎の滞水が引きしだい水洗をし、消毒剤や石灰の散布、石灰塗装を行う
- (3) 糞尿が飼料に付着しないように注意する。
- (4) 糞尿貯留施設、野外堆積場からの「れき汁」が流れ出ないように、側溝などを設ける。

(参考)

9月9日～12日15時までの降水量等 (アメダス)

地点名	降水量 mm	最大風速 m	最低気温	日照 min
旭川	173.0	4	13.2	44
深川	259.5	5	13.5	2
札幌	153.5	6	14.6	104
網走	196.0	14	13.4	206
帯広	161.0	8	13.3	0
函館	104.5	13	13.4	650